平城宮東区朝堂院の調査（平城第602次）

2018年10月から開始した平城宮東区朝堂院東門の調査では、奈文研ニュースNo.72にて調査前半部の成果、特に奈良時代後半の遺構について報告しました。今回はその後あきらかとなった奈良時代前半の遺構を含めた調査成果について報告します。

調査の大きな目的は、奈良時代前半の東門周辺の解明にありましたが、特に東門の有無が焦点でした。調査の結果、奈良時代前半の東門や区画塀である掘立柱塀の遺構を検出し、奈良時代後半の遺構も含めて、大きく三つの成果をあげることができました。

一つめは、平城宮造営時の整地土や奈良時代前半の東門、区画塀である掘立柱塀の遺構を確認したことです。平城宮造営時の整地土は、厚さが最大約1.5mにも及ぶ大規模なもので、西から東に順に積むようにして埋め立てていました。奈良時代前半の東門や掘立柱塀はこの整地土上に築かれていました。

奈良時代前半の東門の基壇規模は、南北約20m（66尺）、後述の掘立柱塀の位置から推定して、東西は約10m（33尺）であることがわかりました。基壇上には掘立柱の柱穴を合計11基検出し、東門は桁行（南北方向）中央間のみを15尺とし、その他を10尺、梁行（東西方向）を12尺とする掘立柱建物の５間門であることが確認できました。また、掘立柱塀の基壇を東門の北および南で検出し、基壇上に東門北で３基、南で４基の掘立柱の柱穴を確認しました。掘立柱塀の柱は東門の妻柱から、約3.0m（10尺）等間で立てられていました。

これら奈良時代前半の東門や掘立柱塀の基壇は、奈良時代後半にも踏襲され、東門は掘立柱建物から礎石建物へ、区画塀は掘立柱塀から築地塀へと造り替えられたことがあきらかとなりました。

平城宮造営時の整地土（調査区南壁、北西から）

二つめは、奈良時代前半の東門が計画的な建物配置にもとづいていることが判明したことです。東門の桁行全長は55尺になり、この長さは東門のすぐ西に建つ東第二堂と第三堂の建物間の距離と一致します。つまり、奈良時代前半の東門は計画的な建物配置によって建設されていたと考えられます。

最後は、掘立柱塀の遺構から、東区朝堂院の東西規模が確定したことです。東区朝堂院の南北中軸に位置する東門の両端で掘立柱塀の遺構を検出したことから、東区朝堂院の東西幅は約177mであったことが確定し、当時の尺度の600尺（500大尺）で計画施工されていたことがわかりました。そして、奈良時代後半でも東門や区画塀の位置は踏襲されるため、東区朝堂院の東西規模は奈良時代を通じて変化していないことがあきらかとなりました。

これらの調査成果は、東区朝堂院の造営計画や藤原宮から長岡宮にかけての朝堂院の変遷を知るうえでも非常に重要な成果といえます。東区朝堂院の発掘調査はこの調査をもって一区切りとなりますが、隣接する東方官衙地区やその先にある東院地区の調査はこれからも継続します。東区朝堂院との関わりも想定されるため、今後の調査もどうぞご期待ください。

（都城発掘調査部　福嶋 啓人）

奈良時代前半の東門と掘立柱塀（南東から）